

# 『君よ、我らの痛みがわかるか』

—朝鮮現代史百年とアメリカ—

下山 房雄

本稿はタイトルを比較して頂くとわかるように本誌前々号(104号)拙稿の続きである。その叙述の前に、前号(105号)拙稿の補遺を書く。丹波マンガン鉱山朝鮮人労働の有り様を野中広務が語っていることを紹介しておきたいのである。その最近事例は、今話題の赤旗(09年6月27日)インタビュー「憲法・戦争・平和」における次の発言だ—「私の生まれ育った京都府船井郡園部町がある口丹波といわれる地方には戦争前、マンガンなどの鉱山がありました。僕は子どものころ、鉱山で働く朝鮮人が、背中にたくさんの荷物を背負い、道をよろよろ歩く、疲れ切つてうずくまるとムチでパチッと叩かれ血を流しながら、はうようにまた歩き出す、そんな姿を見てきました。」

この野中の描写は、私が前号拙稿でマンガン記念館見学坑道掘りの有り様を引用した文献(李龍植『丹波マンガン記念館の7300日』解放出版社 四六判 205頁 本体1800円)にある次のような聞き取り記録と照応している。

—「朝鮮の人は、背負い子に一杯鉱石を積んで坑内から中腰で出てくるんです。麻袋に入れた鉱石ですから二〇〇キロあります。それを背中に背負って中腰で歩くなんて、並み大抵の仕事ではありません。」

さて本題に入ろう。『ノグンリ虐殺事件』の著者かつ主人公であるチョン・ウニョンは、この本の中に下掲の三連詩を掲載している。彼が1950年秋に南進する共和国人民軍を逃れて釜山にいた折に、龍頭山公園で創った詩である。龍頭山は10年ほど前、私も訪ねた。秀吉による二度の「朝鮮征伐」(1592, 97)の折、龍頭の亀甲船を擁する朝鮮水軍を指揮して活躍した朝鮮の英雄=李舜臣(イ・スンシン)将軍の立派な銅像が立っていた。チョンの本には銅像の叙述が無いので、ソウルの像と同じく、パク体制の民族主義高揚策のもとで設置されたものか。

詩は朝鮮近現代の朝米関係を詠っている。「君よ」の「君」はご覧の通りアメリカのことだ。

① 「君よ、我らの痛みがわかるか  
遠い以前君は我らに  
友達になろうと近づいてきたね  
そして不義なる利を得ようと

玄界灘の向こうの我らの隣人と  
黒い約束に心変わりしたとき  
三十六年の永い歲月我らは  
暗い桎梏の中でさまよわねばならなかったのだ

② 君よ、我らの痛みがわかるか  
いったい君に何の権利があつて  
数千年わが先祖の骨が埋まった  
この山河を真っ二つにして  
北の剣を手にした赤い友らが  
戦いを始めようとするのを知っていたらうに  
コリアお前は私の垣根の外にあるのだと  
大声で叫んで去って行ったのだ

③ 君よ、我らの痛みがわかるか  
我らを火の中から救おうと  
この地に君はまたやって来た  
しかし、しかし君は  
どうして鹿のようなわが民を  
羊のような彼らをあれほど無残に害したのか  
訴えかける地下の血の声  
君の耳に聞こえないのか

第3連は『ノグンリ虐殺事件』が描くテーマそのものだからよくわかる。第2連は本の中に多少の説明がある。1950年1月の米國務長官アチソン演説—米国防衛線から朝鮮半島を除外すると受け止められる演説のことらしい。武装の戸締りが無いと「共産勢力」が侵略するとのダレスの真空理論みたいな把握なのかと抵抗感を覚えるが、自称「社会主義国」の侵略をいくつも経験した今日では、一分の理はあると受容する以外にない。第1連は分からず調べた。アメリカはフィリピンを、日本は朝鮮をという植民地化の取引をした桂—タフト協定(1905年)のことかと思う。私が福岡に住んでいれば歴史家の西嶋有厚さんを訪ねていろいろ勉強したいところだ。来年は韓国併合百年の年である。おまけにNHKスペシャルドラマで「日露戦争」美化が危惧されてもいる。本誌上で西嶋さんがあの時代の帝国主義諸国の朝鮮を巡る政策実践を書いてほしいと切に思います。

(寄稿 九大チンタオ大、下関市大各名誉教授)